

---

# 魔法使い＝レジナス

赤屋根

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法使い＝レジナス

### 【Z-ONE】

Z-822P

### 【作者名】

赤屋根

### 【あらすじ】

順調な高校生活を送る予定だった竹島順は、魔法使い＝レジナスを名乗る少女と出会った事により、波乱万丈な毎日を送ることになる。少女、ミサとの偶然出会った事で、レジナスの世界とどんどん関わりあう羽田だ。

## 奇妙な一日

俺はその日、死と隣り合わせにいた。

いつもと同じように一日を過ごし、いつもと同じ帰り道で、空にほんやりと浮かんだ朧月。

意味のない考え方をしながら聞いた低い声は、始めは空耳か何かだと思った。

しかし違った。

薄暗い中でもはつきりと目立つ黄色と黒の縞。

そこにいたのは巨大な虎だった。

なぜそこに豹がいるのか、その疑問が起る前に俺の頭に浮かんだのは、死にたくないという思いだった。

十メートルと離れていないその虎から、全速力で逃げだす俺。悲鳴はあげていたかもしないし、いなかつたかもしない。高校に入ると同時に一人暮らしをしようと借りたアパートは、家賃のみをみて選んだ為、人通りが少ない、街灯すらない場所にぽつんとたっている。

今はそれがとても恨めしかった。走つても走つても人に遭遇しない。走りながら後ろを確認すると、虎はしっかりと俺の事を追いかけてきていた。

金色の目が怪しげな光を放っている。

それにもなんて大きさだ、頭の高さは俺の肩くらいあるし、頭の大きさは小さいイヤ位ありそうだ。

破裂しそうな心臓と棒になりそうな足を無視して、俺はさらにスピ

ードをあげる。

アパートまで来ると、階段を三段飛ばしで駆け上がった。ラツキーな事に、部屋のドアが開いている。

部屋に飛びこみ、ドアを閉める前に、一瞬背後を確認すると…

虎は消えていた。小さな薄汚れた野良猫が足元に擦り寄つてきているが、丸太のような足をした、ナイフのような牙をもつたさつきの虎は跡形もなく消えている。

呆然としたまま、俺は必死で息を整えようとした。下を見下ろすが、虎はやはりいない。とりあえず安心すると同時に、冷静さを取り戻しつつある俺は、部屋の中を見て、また呆然とした。

そこにいたのは、まるでそこが自分の部屋であるかよつこいつ正在する、クラスメイトの里季みさだった。

クラスメイトといつても、一回も口をきいた事はない。高校が始まってから一週間、里季みさはちょっととした話題の的だった。背こそ低かつたが、くりつとした大きな目は青みをおびたグレーで、彫りの深い顔立ちは日本人離れしていたし、真っ黒い短めの髪はつやつやと輝いていた。歩く姿は快活そうで、好奇心旺盛な目をしていたが、彼女は友達を作る気がまったくないようで、だれとも話さなかつた。

しかも一週間をすぎたころからまったく学校に来なくなり、学校が始まつてから一ヶ月がたつた今では、里季みさは話題にあまり上がらなくなっていた。

「おかえりっ。竹島順」  
たけしまじゅん

よつという風に手をあげて、まるで何年もの知り合いであるかのよ

うに話かけてくる里季みさにむかって、内心毒づいた。

「なんでここにいるんだよ」

眼鏡をとつて顔の汗をぬぐいながら、問い詰めようとした里季みさに俺は近づいていく。

「ダイガーチゃん、こわかつたあー？」

立ち上がり、上田使いでりこいつとしながらやつ言われ、俺はびくつとした。

「そうだよ、動物園から逃げ出してきたのかしつねえナビ、虎が追いかけて来て…警察に連絡しないと」

そういうて鞄から携帯電話を取り出そうとする俺を里季みさは制止する。そして何故か部屋の外に出て、汚い子猫を抱き上げた。

「その心配はないよ。ダイガーチャんの正体はこの子だもん」

俺は里季みさの勘違いつぱりに睡然とする。しかし今は里季みさにかかわっている場合じやない。

「わかった。わかったからとりあえず帰つてくれ」

そう言って強引にドアを閉めようとすると、彼女は続けた。

「みさは勘違いしてないし、ほんとの事をいつてるよ」

俺が対応に困つていると、彼女は更に俺を困らせる事を囁く。

「みさが、この子に魔法をかけたの。虎に見えるよつこ。」

「こいつと笑う彼女に、俺は本当に困つてしまつた。

「まあまあ部屋でゆっくり話すよ」「

そういうと里季みさは子猫を抱いたまま勝手に部屋に上がりここんでくる。

何をしていたのか知らないが、部屋のテーブルの上には、トランプがばらばらと散らばっている。

俺は胡散臭そうな視線を里季みさに投げかける事しかできなかつた。里季みさは少し頭がいっちやつているんだろうか。それともおかしいのは学校帰りに虎を見てしまつ俺なのか。

「結果からゆづと、ジユンはおかしいって事が決定！」

俺の内心を見透かしてか、里季みさはのん気にそんな事をいづ。

「ジユンが普通のヒトなら、この子はトライちゃんに見えるはず。ジユンがおかしいのは、この子が、眞実の姿の子猫に見えるってトロロ

ロ

俺は里季の言つてゐる事の意味がまったく理解できない。

「ミサの変化術をジユンは見破つちやつた。つまり、ジユンには、ミサと同等レベルの魔力があるってコトなの」

それまで、ここにこしてゐた里季は、ここでふと真顔になり、ぼーとつたている俺に近づいてくる。

「レジナスは知つてゐるよね？」

首を傾げたまま、里季は俺の田を探るように覗き込んでくる。俺は黙つて首を横に振る。

「カルメラングへ行つた事は？」

俺はまた首を横に振る。どちらの言葉にも聞き覚えはなく、何を言つてゐるのか検討もつかない。

しかしそんな俺の反応を見て、里季みさは驚いたようだ。田をぐりぐりさせて仰け反つた。

そして椅子に勝手に座り込み、指を口にあてて、何かを考え込んで

いるよ'つだ。

暫く一人の間に沈黙が流れた。その沈黙を先に破つたのは里季だつた。

「もし仮に万が一、ジョンか嘘をついていないとしたら、レジナスを簡単には信じてくれないよね」

俺は嘘をついてはいけないのだから、仮にとか万が一とか言わないで  
欲しい。

「じやあどっておきの手品を見せてあげる。やこのアーリンガを持つてこられて」と、

そう言って、里季は勝手に外に飛び出していく。俺はどうすべきか迷つたが、しぶしぶ靴を履いて外に出た。

「へせむへせむ」

そう言いながら、里李は俺の3mほど前を鼻歌まじりに歩いてゆく。どこに行くのかと思つたら、コンビニに入つていつた。何をするのかと不安になりながら、俺も後に続く。

里季は買い物カゴに、ぽんぽんと商品を入れていく。商品を見て見ると、カレー味とか唐辛子系とか辛いものばっかりだ。カゴが大体一杯になると、レジに向かった。

「おれくたさー！」

レジの店員がテンポよく商品をスキャンしていく。

「三万一千円になります」

そして、里李がポケットから何食わぬ顔で取り出したのは、さつきのトランプだった。

驚いて制止しようとする俺を里李が制止する。

「ありがとうございます。またの「」来店をお待ちしています」

つりを取り出し、里李に渡した。

帰り道、俺は呆然としていた。これはどつきりか？誰が何の為に？

それとも？それとも何だつていうのか。

しかし俺の頭に三週間前のある記憶がよみがえってきた。

「里季、学食で差し出しあった紙切れって…」

「あれはお金」

里季は買つてきた商品を俺にほとんど持たせて、スナック菓子を食べながら何食わぬ顔で言った。

「あの時、気づいたの。ジュンはなんか変だなーって。なんでお金に見えてるはずなのに不思議そうな顔してるんだろーって」

里季が折り紙のような紙切れで、学食で買い物をするのを俺は数回目撃していた。

食券かなにかだと始めは思つたが、一ヶ月たつてもそんなものはない事がわかり、少し不思議に思つていたのだった。

部屋に帰ると、里季は買ってきたものの中から、適当に何個かを取り出し、テーブルの上に広げる。

そして椅子にすわり、足を組んでテレビをつけた。まるで自分の部屋にいるかのようなくつろぎよつだ。

「テレビってすごいよねー、ミサあんまり人間界に来たことなかつたから、びっくりしちゃう。」

俺はどう反応したらいいか分からず、黙つているしかなかつた。

「つてゆうか、ミサ、ジュンにいっぱい質問があるんだけど」

そういうと、里季は急にテレビから向き直る。

「それは俺も同じだ」

「じゃあまずミサからの質問ね」

どうやら里季は俺からの質問はすべて後回しにするところのような口調で続けた。

「お父さんと、お母さんは、レジナス？あ。レジナスってゆうのは私たち魔法使いの事で、あなたたちが自分を人間つてうのと同じよう、ミサ達は自分をレジナスつてゆうの」

その質問に、俺は困つてしまつた。俺は自分の親の顔を見た事がない。記憶もない。物心がついた頃には施設にいたし、高校で一人暮らしをするまで、ずっと施設が家だつたからだ。

「親は、知らない」

「あ、そう。」

俺は質問に対する答えとしては不十分じゃないかと思つたが、里季にはその答えで十分だつたようだ。

「カルメランドの学校に来るよつに、中央省から通達はなかつた？」

「カルメランドつて？」

俺は聞きなれない単語に質問せずにはいられなかつた。

「レジナスがいっぽいいる国の事。ほとんどのレジナスはそこで生

活してゐる 人間はいなくて、結界けっかいで人間には見つからないようになつてゐる。町もあるし、学校もある。王様もいるよ

俺は驚いた。本当にそんなどころがあるのだろうか。とても信じられない。

「ジユンほどの魔力があつたら、中央省の役人に見つかって、反強制的にカルメランドの学校に入学させられるんだけど、人間界で今まで生活してたなんて不思議

不思議? そなうなのか? 俺にとつては里季の言つてゐる事のほうが百倍不思議だ。

「つぎ! 今まで、レジナスと関わりあつたことはあつた?」「ある訳ないじやないか。そんな気持ちから少し口調がきつくなつてしまふ。

「いいか、俺は里季のいつ事を信じてる訳じやないからな

里季はぽかんとした顔に一瞬なつた後、明らかに怒つてゐる表情になつた。

「そう!」

そして、椅子を立ち上がり、床の広く空いた部分に向かつて座り込み、こつちを振り向き言つた。

「頭のかたーいジユンに、仕方なく私の一番得意な魔法を見せてあげる」

里季はカーペットの一点を指差した。すると、里季の指先から一筋の青白い光が放たれる。

心なしか、辺りが暗くなつたように感じた。カーペットには、一メートル程の円の中に、複雑な模様をした魔法陣が描かれていく。

ジユンは里季の側へかけよつた。里季は真剣そのものだ。

魔方陣が完成したのか、カーペットに描かれた模様が不規則に青白く輝いてゐる。

里季は自分の髪を一本引き抜いて、魔方陣の中央に置くと、俺の方

に向き直つた。

「カルメランドを見せてあげる」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7822p/>

---

魔法使い＝レジナス

2011年1月4日03時16分発行